

退公連田川市支部

たより

11 月
号

【資料平成三十年度の支部たよりから】

平成 30 年
12 月 9 日発行
連絡先
080-5261-3632
藤崎嘉

私の人生を振り返って

岡部滋子先生（大正十一年八月四日生 九十六歳）



旧姓が乙藤で父が小学校の校長先生で母も小倉師範を出て教師であった。兄弟は私が長姉で下に弟が三人いた。女の子一人ということ、両親から特に可愛がられた記憶がある。

両親は共稼ぎであったけれども、かぎつ子でなく祖父に育てられた。暮らしも不自由なく家には、女中さんがいた。私は、美容師になりたかったけれども、父母に、先生になりなさいと言われ先生の道に進んだ。家は、中津原にあり勾金尋常小学校に一時間もかけて今のように舗装された道でなく山の中を通った。その後、後藤寺にある、田川高等女学校を（現西田川高等学校）卒業した。

小学校の先生になるために、小倉師範学校で試験を受け、昭和十五年二月に教員免許を取得した。

昭和十五年四月から鎮西小学校に新規採用された。鎮西小学校は長かった。その後大藪小学校、田川小学校、大浦小学校を最後に、昭和五十六年三月に退職した。勸奨退職を受け五十六歳で学校を後にした。

教師生活の中で一番思い出に残っていることは、終戦のころ鎮西小学校で五・六年生を持った時、吉永先生が男子学級・下山先生が女子学級、私が、男女学級を持った時、十五人全員が旧制中学校に合格したことである。炭鉱閉山のころ、学校の様子は仕事場がなくて、多くの子ども達が転校していった。残った子どもたちは、生活が厳しい子どもが増え生活保護を受ける家庭が増えた。しかし、子どもが荒れるということとはなかった。

三十六年間教師生活をして、私を慕って、クラス会をずっと開いてくれることが教師冥利に尽きることである。今から、三年前にも、大藪小学校で三・四年生を受け持った子どもが、私のところを訪ねて愛知県から会いに来た。その子は六十五歳になり年金生

活を過ごしているということである。

私は、二十四歳の時結婚して、夫が国立病院の薬剤師をしていたので、転勤が多く一人で、子どもたちと家を守って暮らす時間が多かった。子ども達が自立し夫が亡くなった時から、独り暮らしを続けてきた。しかし、体調を悪くして、救急車で糸田病院に運ばれ入院することになった。そのことをきっかけに、今の施設に入ることになった。

施設では、私が一番年上で、以前カラオケ教室で福波先生から二十年間習った。施設でも、カラオケの時間が一番好きである。そのほか、積極的に皆と活動している。今の、生活は楽しい。絵をかくのは、苦手であるが、計算問題などは、得意である。学校に行っていないので計算ができない入所者もいる。

今現在数えて九十七歳、後二年もすると退職公務員連盟から白寿のお祝いに祝詞と記念品がもらえる。あと四年の百歳までは元気でいたいと思っている。

退公連に対しては、過去白鳥社宅で世話人がいた。しかし、世話（班長）をしている人が亡くなって退公連の連絡が途絶えた。世話をしていく人がいないと退公連が成り立たないと思う。

編集後記

岡部先生は、この施設の中で一番年上であるが、皆さんを引っ張っていくリーダーとして楽しく活動しておられることが感じられた。ただ、外出するときは、付き添いがいないと外出できないという制約があり、退公連の総会には、昨年までは鷹羽会館に出席していたけれども、今年からは参加が危ぶまれる。あれだけ頭脳明晰でありながら、参加できないことが残念でならない。それから、弟の英一さんが私と一緒に金川中学校でお世話になった、益美先生のご主人であることを初めて知りました。

最後に、先生の目標である百歳まで健康で楽しく過ごせますよう皆さんで応援したいと思います。